



松村真司, 矢吹 拓(編)

## 『外来診療ドリル 診断&マネジメント力を鍛える 200 問』

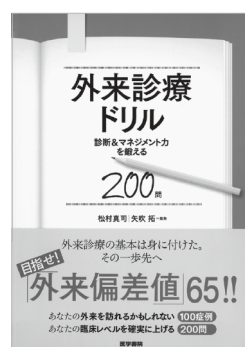
〔評者〕 やわらぎクリニック副院長 北 和也

桜が咲き始めた春の頃、本書はついに僕の手元に届いた。手に取ると同時に目に飛び込んできた「目指せ！ 外来偏差値 65!!」のキャッチコピーに、なぜだか少し胸が躍る。「100 症例 200 問か、ならば毎日 3 症例 6 問ずつ解いて、1 カ月と少しで終わらせることができる」。あの日、確かに僕はそう思ったんだ。

鉛筆で解いて右上のチェックボックスに○×をつけて、あとで集計する。滑り出しはすこぶる好調で、○が並んだ。「も、もしかして、高偏差値を叩き出せるのでは!?!」。……傲慢な思いが脳裏をかすめる。しかし、考えが甘かったことに、すぐに気づく。片頭痛によるアロディニア、低髄液圧症候群の治療法、月経前症候群(PMS)、PPI(プロトンポンプ阻害薬)以外の microscopic colitis……。どうやら、知識の整理ができていないようだ。これまでも見逃しがあつたに違いない。生命には直結しないものの QOL を下げ続けうるような疾患については、ぜひともしっかり整理しておきたいのだ。だって、よくわからずにずっと対症療法をし続けるなんて、とても悲しい。今日ここでしっかり勉強して、明日はきっと見逃さない。そう僕は誓った。

その一方で、問題を解いた前後に一過性全健忘、レム睡眠行動障害、安静で下肢痛が悪化する末梢動脈疾患(PAD)の患者さんにも出会う。「あなたの外来を訪れるかもしれない 100 症例」。……オビの言葉に、なるほどと頷く。これまでも、幾度となくこういったことはある。日常的に学び準備していた者にだけ微笑む“診断の神”はいるのだ。これは、静かにビッグウェーブを待ち続け、訪れたと同時に華麗に波乗りしてみせる「サーファー」の感覚に近い。でも僕はサーフィンをしないので、その感覚はあまりよくわからないんだ。何にせよ、そう、僕は一生勉強なんだ。

ところどころの選択肢・解説には、魂が込められている。「ここは、ぜひシェアしておきたい」という筆者の思いが伝わってくる。良性発作性頭位めまい症(BPPV)は「典型的な症例のみを BPPV と診断する」のが鉄則、というフレーズに胸が熱くなる。診断だけでなくマネジメントについても、非常



学び続けること  
サーファーの如し!

にコモンなものから比較的レアなものまで触れられている。レアなものと言っても確かに会おうし、コモンなものについては曖昧になりがちな部分についても限られたページのなかで見事に掘り下げられている。あまり話題にならないけれど、実地臨床では常に遭遇する問題も扱っている。長らくの難聴の原因が耳垢塞栓だったという高齢者がたまにおられるが、耳垢除去後に聞こえがよくなり感謝されるのは、ちょっとしたことかもしれないが嬉しいことである。

毎日 3 症例 6 問ずつ解けば、1 カ月と少しで終わらせることができる。あの日、確かに僕はそう思ったんだ。でも、ちょっと挫けそうな時もあつた。そんな時には、よい方法がある。みんなで集まった時に、1 症例だけ一緒に解いてみるのだ。うちのクリニックでは、ナースも一緒に毎朝 5 分間の勉強会をしている。この時に、どさくさに紛れて 1 症例みんなで解いてみれば、一石二鳥なのである。

最終的に 200 問中 132 問正解。僕の外来偏差値はいくつなんだ、というのは少々気になるころではあるが、こんなに質の高いテキスト(和製 MKSAP と言っても過言ではない)を楽しみながら解いて外来診療スキルが上がるだなんて、こんな贅沢な話はない。そう、僕らは一生勉強なのだから。

● B5 / 頁 212 / 2016 年 / 定価: 本体 4,200 円 + 税  
[ISBN978-4-260-02505-8] 医学書院刊